

8/31

「月の沙漠」夜の砂漠を、月の光にてらされ、ラクダの背に乗って旅する王子さまとお姫さまが目に見えかけます。実は砂漠ではなく、沙漠が正しいことを、今回調べて初めて知りました。よく砂漠と誤記されている、実際そうですね。加藤まさをは日本画家、詩人で、大正 12 年(1923)に少女倶楽部に発表したものに当時まだ若手だった作曲家の佐々木すぐるが曲を付けたということです。

『月の沙漠』

作詞: 加藤まさをは 作曲: 佐々木すぐる

- 1 月の沙漠を はるばると
旅のらくだが 行きました
金と銀との くら置いて
二つならんで 行きました

- 2 金のくらには 銀のかめ
銀のくらには 金のかめ
二つのかめは それぞれに
ひもで結んで ありました

- 3 先のくらには 王子さま
あとのくらには お姫さま
乗った二人は おそろいの
白い上着を 着てました

- 4 ひろい沙漠を ひとすじに
二人はどこへ いくのでしょうか
おぼろにけふる 月の夜を
対のらくだは とぼとぼと
砂丘を越えて 行きました
だまって越えて 行きました

8/29

「ぞうさん」、これも團伊玖磨の作曲ですね。ぞうさんといえば、ぞうさんを歌ったダークダックスのぞうさんこと、遠山一さんを思い出します。ダークダックスは遠山さんを除いて皆さん故人となられたようですが、遠山さんはお元気でしょうか？

『ぞうさん』

作詞:まどみちお 作曲:團伊玖磨

ぞうさん ぞうさん
おはなが ながいのね
そうよ かあさんも
ながいのよ

ぞうさん ぞうさん
だれが すきな
あのね かあさんが
すきなよ

8/27

私は幼い頃からアリちゃんとかアリンコとか呼ばれていました。まだヒアリは知られて
いませんでした。

『おつかいありさん』

関根栄一作詞・團伊玖磨作曲

あんまりいそいで
こつつんこ
ありさんと ありさんと
こつつんこ
あっちいって ちょん ちょん
こっちきて
ちょん

あいたたごめんよ
そのひょうし
わすれた わすれた
おつかいを
あっちいって ちょん ちょん
こっちきて

ちよん

8/25

孫の写真を見ると思い出す歌。サッチちゃんじゃなくてアッチちゃんですが。アッチちゃんはバナナ一本食べちゃうそうです。

『サッチちゃん』

作詞: 阪田寛夫 作曲: 大中 恩

サッチちゃんはね
サチコって いうんだほんとはね
だけど ちっちゃいから じぶんのこと
サッチちゃんって よぶんだよ
おかしいな サッチちゃん

サッチちゃんはね
バナナがだいすき ほんとだよ
だけどちっちゃいから バナナを
はんぶんしか たべられないの
かわいそうね サッチちゃん

サッチちゃんがね
とおくへいつちゃうって ほんとな
だけど ちっちゃいから ぼくのこと
わすれて しまうだろ
さびしいな サッチちゃん

8/23

蛍の季節もそろそろ終わりのようです。以前「ほたるよこい」を投稿しました(5/28)が、もう一つ思い出す蛍の歌。

『蛍(ほたる)』

井上越作詞・下総皖一作曲 昭和7年(1932)

蛍(ほたる)のやどは川ばた楊(やなぎ)、
楊おぼろに夕やみ寄せて、
川の高目(めだか)が夢見る頃は、
ほ、ほ、ほたるが灯をともす。

川風そよぐ、楊もそよぐ、
そよぐ楊に蛍がゆれて、
山の三日月隠れる頃は、
ほ、ほ、ほたるが飛んで出る。

川原のおもは五月(さつき)の闇夜(やみよ)、
かなたこなたに友よび集(つど)い、
むれて蛍の大まり小まり、
ほ、ほ、ほたるが飛んで行く。

8/21

今年の川崎・多摩川の花火大会は雨のため中止となりましたが、各地で花火大会が開催されているようです。大きな打ち上げ花火は壮大で美しいですが、家庭の線香花火も風情があります。

『花火』

作詞:井上 赳 作曲:下総皖一

昭和 16 年(1941)

※ドンとなった花火だ きれいだな
空いっぱい ひろがった
しだれやなぎが ひろがった※

△ ドンとなったなんびやく 赤いほし
いちどにかわって あおいほし
もいちどかわって きんのほし △

米 繰り返し

△ 繰り返し

8/20

もう一つの「海」は 28 年後、昭和 16 年(1941)作曲の童謡になります。(海は広いな
大きいな)

こちらは口語体で、作詞者・作曲者も明らかなので童謡ですね。

『海』

作詞:林柳波 作曲:井上武士

海は広いな 大きいな
月がのぼるし 日が沈む

海は大波 青い波
ゆれてどこまで続くやら

海にお舟を浮かばして
行ってみたいな よその国

もう一つの「海」は 28 年後、昭和 16 年(1941)作曲の童謡になります。(海は広いな
大きいな)

こちらは口語体で、作詞者・作曲者も明らかなので童謡ですね。

8/19

「海」という歌が 2 つありますが、まず大正 2 年(1913)の「海」。(松原遠く消ゆるところ)

『海』

作詞・作曲:不詳

松原遠く消ゆるところ
白帆(しらほ)の影は浮かぶ
干網(ほしあみ)浜に高くして
かもめは低く波に飛ぶ

見よ昼の海
見よ昼の海

島山闇に著(しる)きあたり
漁火(いさりび)光り淡し
寄る波岸に緩くして
浦風軽(かろ)く沙(いさご)吹く
見よ夜の海
見よ夜の海

8/17

「我は海の子」で海が出てきましたので海の歌をいくつか。まず「砂山」。歌詞を見てすぐに思い出すのは中山晋平の曲ですが、山田耕筰も同じ詞に作曲しているんですね。聴いてみますと、こちらも聴いたことがありました。

『砂山』

作詞: 北原白秋 大正 11 年(1922)

作曲: 中山晋平

山田耕筰

海は荒海 向こうは佐渡よ
すずめなけなけ もう日は暮れた
みんな呼べ呼べ お星さま出たぞ

暮れりや砂山 汐鳴(しおなり)ばかり
すずめちりぢり また風荒れる
みんなちりぢり もう誰も見えぬ

かえろかえろよ 茱萸原(ぐみわら)わけて
すずめさよなら さよならあした
海よさよなら さよならあした

8/14

私の親しい友人と妻の叔母が亡くなりました。友人は私を合唱に誘ってくれた人で、す。『主よみもとに近づかん』を亡くなった 2 人にささげます。日本語の歌詞に続いて

英語の歌詞を掲載します。私の父はキリスト教の信者ではありませんでしたが、これをよく英語の歌詞で歌っていたように記憶しています。自作のシンプラーを奏でながら。

『主よみもとに近づかん』

カトリック聖歌 658 讃美歌 320

1 主よ、みもとに 近づかん
のぼるみちは 十字架に
ありともなど 悲しむべき
主よ、みもとに 近づかん

2 さすらうまに 日は暮れ
石のうえの かりねの
夢にもなお 天(あめ)を望み
主よ、みもとに 近づかん

3 主のつかいは み空に
かよう梯(はし)の うえより
招きぬれば いざ登りて
主よ、みもとに 近づかん

4 目覚めてのち まくらの
石をたてて めぐみを
いよよせつに 称えつつぞ
主よ、みもとに 近づかん

5 うつし世をば はなれて
天(あま)がける日 きたらば
いよよちかく みもとにゆき
主のみかおを あおぎみん

"Nearer, my God, to thee"

1. Nearer, my God, to thee,
Nearer to thee!

E'en though it be a cross
That raiseth me.
Still all my song shall be
Nearer, my God, to thee,
Nearer, my God, to thee,
Nearer to thee!

2. Though like the wanderer,
The sun gone down,
Darkness be over me,
My rest a stone,
Yet in my dreams I'd be
Nearer, my God, to thee,
Nearer, my God, to thee,
Nearer to thee!

3. There let the way appear,
Steps unto heav'n;
All that thou sendest me,
In mercy giv'n;
Angels to beckon me
Nearer, my God, to thee,
Nearer, my God, to thee,
Nearer to thee!

4. Then with my waking thoughts
Bright with thy praise,
Out of my stony griefs
Bethel I'll raise;
So by my woes to be
Nearer, my God, to thee,
Nearer, my God, to thee,
Nearer to thee!

5. Or if, on joyful wing
Cleaving the sky,

Sun, moon, and stars forgot,
Upward I fly,
Still all my song shall be
Nearer, my God, to thee,
Nearer, my God, to thee,
Nearer to thee!

Text: Sarah F. Adams, 1805–1848

Music: Lowell Mason, 1792–1872

8/11

天気は冴えませんが、蒸し暑く、やはり夏です。これから法事で妻の実家、伊賀市に向かいます。

夏は海、夏の海といえば「我は海の子」が思い出されます。文部省唱歌。作詞者・作曲者不詳とありますが、調べられた方があって、作詞者は児童文学者の宮原晃一郎で、故郷鹿児島県天保山公園の海岸から見ての桜島を思い浮かべて作詞されたということです。

『我は海の子』

作詞: 宮原晃一郎 作曲: 不詳

一

我は海の子 白波の
さわぐいそべの 松原に
煙たなびく とまよこそ
我がなつかしき 住みかなれ

二

生まれて しおに浴(ゆあみ)して
波を子守の 歌と聞き
千里寄せくる 海の気(き)を
吸いて童と なりにけり

三

高く鼻つく 磯の香(か)に
不断の花の かおりあり
なぎさの松に 吹く風を

いみじき楽(がく)と 我は聞く

(今の教科書はここまでですね。)

四

丈余(じょうよ)の ろかい操(あやつ)りて
行手(ゆくて)定めぬ波まくら 百尋千尋(ももひろちひろ)
海の底 遊びなれたる庭広し

五

幾年(いくとせ) ここにきたえたる
鉄より堅き かいな有り
吹く塩風に 黒みたる
肌は赤銅(しゃくどう) さながらに

六

波にただよう 氷山も
来(き)たらば 来(き)たれ恐れんや
海まき上(あ)ぐる 竜巻も
起(おこ)らば 起(おこ)れ驚かじ

七

いで大船(おおぶね)を 乗り出して
我は拾わん 海の富
いで軍艦に 乗組みて
我は護(まも)らん 海の国

8/9

今日 8月9日は72年前に長崎に原爆が投下された日です。永井隆博士を主人公にした映画「長崎の鐘」が思い出されます。藤山一郎さんの歌う主題歌。台風一過で晴れ上がった空を見上げると、「こよなく晴れた 青空を 悲しと思う せつなさよ。。。』の一節がよみがえります。

『長崎の鐘』

作詞: サトウハチロー 作曲: 古関裕而

こよなく晴れた 青空を
悲しと思う せつなさよ

うねりの波の 人の世に
はかなく生きる 野の花よ
なぐさめ はげまし 長崎の
ああ 長崎の鐘が鳴る

召されて妻は 天国へ
別れてひとり 旅立ちぬ
かたみに残る ロザリオの
鎖に白き わが涙
なぐさめ はげまし 長崎の
ああ 長崎の鐘が鳴る

こころの罪を うちあけて
更け行く夜の 月すみぬ
貧しき家の 柱にも
気高く白き マリア様
なぐさめ はげまし 長崎の
ああ 長崎の鐘が鳴る

8/6

今日は8月6日、広島原爆投下から72年目になります。去る2月から始めて、自分の覚えている懐かしい歌を投稿してきましたが、今日は例外で、知らなかった歌を掲載します。禎子の折り鶴を検索してこの歌に出会いました。

2歳で被爆し、12歳で世を去った広島佐々木禎子さんの甥子さんの佐々木祐滋と、かれがボーカルを務めるロックバンド GOD BREATH の作品、平和への想いを綴っています。下記の URL に楽譜も掲載されています。

<http://www.utagoekissa.com/inoriinori.html>

『INORI～祈り～』

作詞: GOD BREATH 作曲: 佐々木 祐滋

別れが来ると知っていたけど
本当の気持ち言えなかった
色とりどりの折り鶴たちに

こっそり話しかけていました
愛する人たちのやさしさ
見るものすべて愛したかった
もう少しだけでいいから
皆のそばにいらさせて下さい

泣いて泣いて泣き疲れて
怖くて怖くて震えてた
祈り祈り祈り続けて
生きたいと思う毎日でした

折り鶴を一羽折るたび
辛さがこみ上げてきました
だけど千羽に届けば
温かい家にまた戻れる
願いは必ずかなうと
信じて折り続けました
だけど涙が止まらない
近づく別れを肌で感じていたから

泣いて泣いて泣き疲れて
折り鶴にいつも励まされて
祈り祈り祈り続けて
夢をつなげた毎日でした

別れが来たと感じます
だから最後に伝えたい
本当に本当にありがとう
私はずっと幸せでした

泣いて泣いて泣き疲れて
折り鶴にいつも励まされて
祈り祈り祈り続けて
夢をつなげた毎日でした

めぐりめぐり行く季節をこえて

今でも今でも祈ってる
二度と二度と辛い思いは
誰にもしてほしくはない
誰にもしてほしくはない。

8/4

夕焼け小焼けと来れば、次は「赤とんぼ」。大正 10 年(1921)作。子供のころ、「おわ
れてみた」は赤とんぼが追われていたのかと思っていましたが、(姐やに?)おんぶされ
て赤とんぼを見たんですね。

『赤とんぼ』

作詞:三木 露風 作曲:山田耕筰

夕やけ小やけの 赤とんぼ
負われて見たのは いつの日か

山の畑の 桑の実を
小籠に摘んだは まぼろしか

十五で姐やは 嫁に行き
お里のたよりも 絶えはてた

夕やけ小やけの 赤とんぼ
とまっているよ 竿の先

8/2

「夕焼け小焼け」の歌は、幼い頃鎌倉(杉本寺の近く)で、近所の子達と遊んだ後、家
に帰った懐かしい情景を思い起こさせてくれます。大正 8 年(1919)作詞、当時小学校
の教員を勤めていた中村雨紅は、最寄駅だった八王子駅から実家の恩方村までの
帰路に日々目にした夕焼けの情景を歌い込んだということです。同 12 年 7 月、関東
大震災の 1 ヶ月前に文化社から出版されました。

『夕焼け小焼け』

作詞:中村雨紅、作曲:草川信

夕焼け小焼けで日が暮れて
山のお寺の鐘がなる
おてつないでみなかえろう
からすといっしょにかえりましょ

子供がかえたあとからは
まるい大きなお月さま
小鳥が夢を見るころは
空にはきらきら金の星